又池の周囲には、四ヶ所田圃に入り込んだ幅約三米長さ三十米位の切り込み入り江（私達はこれをエイゴと呼んでいた）があったが、昔は水車で水を水田に汲み入れていたので、恐らく灌漑用水用として作られたものと思われるが詳しいことは分からない。

この入江に湧水の出るところがあり其処にはイモリ（私達は〝カンコロメ〟別名赤腹）が多くいたが、背が黒く腹が赤くワニの子の恰好をしており余り気持ちの良いものではなかった。これが時には釣りの時に食いついて、針をはずすのに一苦労したものである。

この池と溝には魚が多くいて釣りを楽しませてくれたが、当時の釣りは竹竿で餌は「クソミミズ」を使って釣っていたが結構釣れたものである。しかし、私は、今回は特に鯰釣りについて話してみたいと思う。

釣り方は蛙を使っての釣りで古老達が釣っていたのを時々見かけていたが、それは主に初夏で池に菱が生えている時期が多かった。

私の場合は主に秋から初冬、つまり九月から十一月末の時期である。

この頃になると、池に生えていた蓮も葉が枯れて落ち、見透しもよくなる時期で、又食用蛙の子が適当な大きさになり跳び廻る頃でありこの蛙の子を狙った鯰を釣ろうというわけ。

仕掛けは至って簡単、竹竿とテグス一米位と針、餌は稲を刈った跡に指先位の「クソビキ」（蛙の一種）がよくいたのでこれを獲ればよい。

釣り方は蛙の二本の足をテグスで縛り尻より針を頭に向けて差し込むだけ。

先ず池に浮いている蓮の葉を狙って蛙を「ポーン」と投げつける。鯰は蓮の葉の下に居て餌を狙っているわけで、蛙を落とすと鯰が居れば葉が

グラグラゆれる。此の時、おもむろに蛙を葉の縁に持っていってピョンピョンと水面を叩くと「チョボーツ」という音をたてて鯰が食い込んでくる次第！すかさず合わせると心地好い手應えがして鯰が上がってくるというわけ、水面近くて釣り挙げるので余り手間はかからない。

これで昼頃池を一周する間に三～四キロの鯰を五～六匹は釣ったものである。

しかしこの釣り方法で釣る人は当時余り見かけなかった様であるが、魚の特性をうまく利用した釣り方であったと思っている。以上が私の鯰釣りであるが、私は現在ルアーでスズキ等を釣りに行っているが、この鯰釣りも一種のルアー釣り法に似ているような気がする。すでに蛙をイミテーションしたルアーも作られている程である。

昔はいたる所に自然があって幼い頃は自然を友として暮して来た。今は自然もなくなりつつある、もう一度このような池で釣りをしたいものである。

「デジョゴン池の鯰も今は埋め立てられた土地の下にどうしているだろう?!恐らくわずかな空間にひしめきあって細々と生きているかもしれない。しかし彼等は言っている！此の怨みは今に見ておれ！デジョゴン鯰の地震となって怨みを晴らしてやるぞ！と」

私は楽しませてくれた鯰のために心から冥福を祈りたいと思います。

荷馬車引き

道具小路東　西村　満

戦前は荷馬車業者のことを、荷馬車引き、と云っていた。此の時代は荷馬車が貨物自動車の代わりをしていたのである。色々な物資を運搬する

のは、すべてが荷馬車であった。荷馬車にも、法的なきまりがあり、馬方が馬車に乗って、荷の運搬をしてはならない。

日暮れから、夜明けまでは、無燈火で荷馬車を引いてはならない。此の様な制限があり、当時は十銭で、提灯を買ったものです。提灯の商品名を、ぶらさげ提灯と言っていた。ぶらさげ提灯と言うのは誠の商品名では無く、馬車引き者同志の合言葉であり、暗くなってくると燐寸（マッチ）でロウソクに火を付け梶棒にぶらさげるか、馬方が手に持って歩く提灯がぶらぶらゆれるので、ぶらさげ提灯と言っていた。

馬車台の長さは十三尺ぐらいと記憶が定かでない。台には綱を張る鍵、棒立の鍵の取付けは、馬車方の考えに寄って、鍵の取付け数は違っていた。馬車台を造られる職人を、車大工と言って、荷馬車の車輪は車大工の手に寄って、樫木を材料として、造られ、芯棒に通す鉄砲金には、中に油が溜まるように段差があった。

荷馬車の梶場には平金が上下に取付けて有り、台栓と言って、直径三糎余りの鉄の棒で、梶場台と荷台を取り付けて有り、梶場台には樫木で造った梶棒二本を取り付けて、馬車の舵を取るためであり、力綱を取り付ける鍵が両面に取り付けてある。馬が荷馬車を動かすのが力綱である。木城村の川原土場より高鍋駅の土場、亦製材所に木材が荷馬車により運搬されていた。川原に高鍋営林署の土場が有る。土場とは材木を置く場所の事を言っていた。石河内の奥山より樅咎（トガ）松杉檜と、色々な種類の木材が、トロッコにて川原土場に運び出されて来ていた。トロッコを引くのは、犬が二匹か三匹で引っ張っていた。トロッコにはブレーキが取り付けて有り、山師さんがトロッコの速度の調整をするので、下り坂に成ると、犬はト

ロッコの上に飛び乗っていた。帰りは石河内村の食料等を積んで運搬されていた。

木材運搬に高鍋から十二、三台の荷馬車が午前八時過ぎ頃、蚊口方面と途中からの荷馬車が宮越あたりで勢揃いし、川原土場に着くのが十一時頃で有る。それぞれの場所に荷積の用意をし、昼食を取り、四、五名ずつに手分けし材木積み作業をする。樅木は直径六尺程度物が相当数有り、天井板等に利用されていた。長さは七尺切りであり、馬車台に手頃な渡し木を四本掛けて、材木の中心にワイヤロープを廻して、ある程度の間隔の所より馬に引かせてまき上げ乍ら積むのである。馬車台にそのまま積み込みをすると、馬車台の横腹が折れてしまうので、受木亦は枕木と言って直径五寸余りの丸太木を馬車台の巾に合わせて切り、五本台に乗せて此の上に乗せ、積木が動かぬ様にワイヤロープで三ヶ所亦は四ヶ所、はね木を使って締め付ける。全部荷積作業が終わるのが午后四時過ぎであり、土場から大道に出るまでは、それぞれ手伝って、大道で勢揃いし、起手寺までは少々の下り坂で難なく起手寺茶屋まで着き、ひと休みし馬には水を飲ませたり、はみをやり、馬方は豆腐を肴に焼酎を飲んだりして、疲れを取っていた。秋の季節に成ると蛇渕で取れた、鮎の塩焼等があった。小生は何時も豆腐を食べていた。豆腐一丁買って、半丁を馬の飼料にまぜてやると、馬は美味しそうに食べていた。

豆腐一丁十銭焼酎一合十銭であった。三十分余り休み出発。蛇渕坂で馬二頭引きにして此の坂を乗り切り高城に着くと、角屋茶屋で休憩、寒風吹く季節には熱つ熱つの「ウドン」「ソバ」をよく食べた。「かけウドン一杯五銭、具ウドン十銭。」三十分余りして暗くなっているので提灯ぶらさげ出発し、第二難関宿之坂にて、馬二頭引きいて、坂を乗り切る。坂を上り切ると、茶屋が二軒有り、行きには木城に向かって左側の茶屋に寄り、今日は川原土場に何台ぐらい行っただろうかと話を聞き、行くのである。帰りには木城に向かって右側の茶屋に寄り、半時余り休み出発し、高鍋駅土場に午后十一時ごろ着くのであった。

土場には材木の受取人がいて材木の石数を計り出し、運賃が支払われていた。石数によって賃金支払なので、賃金は段々であった。「三円八十銭～三円」ぐらいであった。

荷馬車には台外（ダイハズシ）と言って、長尺の材木を運ぶことも出来た。市之山から百本近くの弁甲材を運搬したことがある。杉木で大きい物は大人二人でだき廻す様な弁甲材、大人一人半でだき廻す様な弁甲材、弁甲材とは、山師さんが杉木を切り倒し、皮を剝ぎ、木の表面と裏面を、山師さんが斧ではつり取り、はつり取った木屑を「コッパ」と言っていた。此の様にして出来た木材を弁甲材と言う。長さは注文に応じて切られていた。十間～十五間物が多かった。「十間＝二十米余り。十五間＝三十米余り」。荷馬車十台で運搬に従事した。現場に午前十時頃着き、台外を使って荷馬車に積むのは楽であった。山師さんが弁甲材を積みよい様にして下さったので、山師さんの思いやりの心であったのでしょう。運搬には、一苦労も二苦労もある。砂利道であり、道路の曲がり角か狭いため、台外しの車輪を右に切り、三尺ぐらい進ませては

左に切り、三尺ぐらい進ませては、此の様な事を数回繰り返して通して行くのであり、此の様な曲がり角道が何箇所か有り、十台の台数で有るので、相当時間を要した。新山の坂道も曲がりくねりで、路面がでこぼこで弁甲材を運搬するのに苦労した坂道であった。

高鍋駅の土場に着くのが午後八時頃であった。大平寺から弁甲材を五十六本運搬しましたが、此の時は急な曲がり角等無く、楽々と運搬が出来た。台外を使って長尺物を運搬する場合は、警察署に、台外し許可を願い出て、「高鍋警察署台外許可証何年何月何日より何月何日まで」と印白旗に書き込まれた旗を馬の鞍に取付けて置かねばならなかった。弁甲材の末口の方には赤旗を立て置くことが決まりであった。

農家において、食用芋作りが盛んであった。蚊口にから芋を買い食用として大阪、神戸、広島と、上方に送られる。から芋買いの仲買い商人の方がおられ、手広く芋買いをされていた。十一月頃より旧正月頃まで、から芋運びの仕事が有る。当時は一袋入り十六貫であった。畑に荷馬車を入れ、五、六俵積んで、道路まで小出しを六、七回繰り返す、道路の場所の良い所で、三十から四十袋余り荷積みして、運搬していた。運搬賃金は袋数亦は距離によって違っていた。二円五十銭～三円五十銭ぐらいの間で支払われていた。農家の方が焼芋をよく食べさせて下さった。畑の隅で芋を堀り乍がら焼芋されていた。焼芋の美味しかった事が思い出に残っている。

道路はすべてが砂利道で、修理には砂利などが使用されていた。当時も国道、県道、町道、村道と区別はされていた。町道については、此の時代については、町民者は村の道と、我が道のように言っていた。

河川，浜等の砂利、砂等無断で取ることは出来なかった。黒谷の郡役所のあとに県土木事務所の支所が有り、砂利、砂等を取る時には、土木事務所に許可証を願い出して、許可を受けなければならなかった。

三角の白布に「高鍋土木事務所許可○坪○合何年何月何日より何月何日まで」と書かれた三角白布を馬鞍に着けて置かねばならなかった。横町に土木事業請負業者の方がおられ、一手に国道、県道の修理を引き受けられていた。業者の方から道路修理の砂利運搬を頼まれ、国道県道に修理用の砂利運びをよくやったのだった。修理区間が決められ、その区間に砂利を石炭箱六杯ずつ三尺間隔置きに下ろして行き、運搬が終了したら、土木事務所管財官立い合いのもとに、砂利の山を○．五合升で計って、砂利の不足分には砂利を増して行かねばならなかった。県職員として道路工夫の方が勤務されていた。砂利を道路に広げる場合は、工夫さん立ち合いのもとに業者が雇用された。人夫の方が砂利を道路に「ジョレン」を使って広げ、路面修理をされていた。土木事務所の管財人は砂利、砂等、許可無く取る者の取締りをされていた。受持ち区間は川南海岸より高鍋富田海岸、此の間の河川を自転車で監視されていた。管財官は人なつっこい人であり、焼酎の好きな人で焼酎の話をすると、楽しそうに色々と面白い話をされる方であった。

砂利、砂の一台の賃金は、距離によって違っていた。蚊口―菖蒲池間は一台五十銭～六十銭、道具小路～町辻頃までは六十五銭～八十銭で運搬していた。

当日は石炭箱十二杯を一合といって荷馬車十台分が一坪と計算されていた。一間は六尺で計算されていたが、山では山師山尺と言って、七尺で一

間として計算されていた。山師さんが切り倒した木材を、山の中から荷馬車に積む所まで、材木に地引環を打ち込み、馬に引かせて引き出してくることを地引出しという。材木を馬車に積み込みする時の道具の種類「万力」「挺子」「つる」「ワイヤロープ」「綱」。荷馬車台に道具箱が取り付けて有り「斧」「鋸切」「鉈」「地引環」「提灯」等作業に必要な道具入れ。馬車の後方に油缶を下げ、休んだ時に車が軽く動く様に、油を挿していた。

荷馬車業者も、月の十六日は山の神様の日であるので、材木運搬に従事する。業者の頭領に成る者が御酒と塩を用意して来て、材木を積む現場で、山の神様に神酒と塩を供え、無事で有りますよう頭領が祭典のお願いをするので、頭領に合わせて業者一同が神様にお願いし、祭事後御酒を軽く頂き、作業を始めます。

山師さんは月の十六日は山の神様の日なので、山に入ることはされなかった。此の日は山師さん達は山の神様祭りを尊重され、休んでおられた。初山に入れ山師さん達は、頭領が御酒、塩、米、水を供え、生木に斧を打ち込み、神様に伐木安全の祈願の祭事を行われ、祭事が済み次第、伐木が始められていた。此の時に山主さんは、かならず、山の神様の泊り木、亦天狗の泊り木と言って一本は残されていた。此の木が家なん代かになった頃は、大木と成り、亦は銘木とも言われ、値よく買われ、家のために成っていたと山師さんの話のなかから戦前は尺貫法で有り、昭和三十年に尺貫法は廃止され、メートル法の新法に変わりました。荷馬車の無燈火は科料十銭でした。その場で巡査さんが領収証を渡され、十銭を徴収されていました。

昭和九年四月、高鍋町、上江村合わせて荷馬車

業者組合の総会が会場、四季亭で一人当たり会費二円五十銭で開催された。時の報告で会員数六十七名、出席者数四十三名と報告あり、他に未加入者が数名いるとの報告がされたとのことです。

馬の飼料として、から芋を、よく洗って、四角の箱に入れ、芋突きで芋を突き、あられの様に小さくし突き芋を籠に入れて、水洗いし、飼料にまぜて馬に食べさせていた。川向こう方面の農家の奥様方が小使銭稼ぎに、朝早く籠にから芋を入れられて、後ろ前に二つの籠を天秤棒で担いで、小丸川の川原を通り稲荷下の渡し舟で渡り、それぞれの得意業者の所に売りに来られていた。石炭箱一杯で六十銭〜八十銭していた。面白いことには、値段を担いで来られた奥様方が付けられ、「今日の芋は秤りが悪いから、六十五銭でようござんす」とか「今朝の芋は、より抜きのから芋で、秤りもよくしてあるので、七十五銭はくだんし」と、和気あいあいの中で、売り買いが庭先でされていたことが思い出される。坂本坂の中腹に、峠の茶屋が二軒有りましたことが、心に深く残っております。

昭和三十六年、荷馬車の道行く往来の姿も、見られなく成りました。荷馬車業者にとっては記念すべき年となりました。

宿の坂の今昔

青木　野村政雄

明治時代の宿の坂は、道巾の狭い山の断崖を通っていた。坂は木浦紫さん宅から下へ始まり（まだ旧道が竹やぶの中に残っている）坂の中間にちょっとした広場がある。そこに清水小学校が明治四十年頃迄あった。学校は義務が四年で四教

室ぐらいとか、道ごし向かいの山の中には比木神社の子供が埋葬されているとかで、比木神社のお里巡りの時には、坂では笛も吹かず静に通られる。子供が後追いするとかで、坂道は夜は寂しい山道。追剝が出るとか、勇気ある人以外通る人はなかったとか。

県道として坂の工事が始まったのは明治三〇年代末期、中間から下は断崖をけずり、上の方は堀割と、其の頃の工事としては難工事であったと思われる。坂が出来る迄は、木城官山から切り出した木材は筏で小丸川を流し、蚊口で陸上げしていた。県道が出来てから、木材は荷馬車運搬となった。しかし、坂は砂利道、長い坂道で馬泣かせ、人馬一体となり苦労して坂を越していた。坂を越してから一息と青木県道には馬車がならび馬には「まぐさ」人は茶店で豆腐を肴に焼酎、店も二軒あり繁盛していた。坂で馬が力つき上る事の出来ない時は、先に上った元気な馬が行き二頭で引き上げ、全部の馬車が坂を越してから、蚊口の貯木場へと、これが昭和の初期迄続いた。

戦後、坂も改良舗装され、荷馬車はトラックに成り、昔の宿の坂は夢物語である。

編集後記

第四集として戦中・戦後の戦争を通して体験された記録「たかなべ戦中・戦後の体験集」を発刊致しましたが、まだ記録として次の世代へ伝えて欲しいという要望がでてきました。そこで今回は戦前・戦中・戦後の生活のようすを「衣・食・住」に分けて、その時代の生活のようすをまとめて頂こうと事業を始めました。

内容としては家庭（家族）を中心にどのように過ごしてきたか、衣服一つ考えてもその時代の移り変わりをまとめていただくことも大切なことで、男性、女性の立場から日常生活のようすを語り継いでもらうということになりました。

しかし、応募して頂きました原稿を拝見しますと趣旨と違った方もおられましたので、内容が広範囲になってしまいました。

第六集は「たかなべの追憶」という表題にしましたが、内容も外地から引き揚げ当時のこと、民主選挙のはじまり、ご苦労さま「亀の湯」など懐かしい思い出が数多く収集されており、興味がもてます。

第一集から第六集まで高齢者ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」（会長西村　満）のみなさんに大変なお骨折りをおかけしましたし、挿し絵と表紙を描いていただいた中嶋正夫（下屋敷）さんに心から厚くお礼申し上げます。

編集者　小澤　浩

※ 収集協力者（敬称略）

○高齢者ボランティア『ふるさとを伝える会』会員

会長　西村　満（道具小路東）
会員　松岡美也（道具小路南）
〃　奥村ヤエ子（大工小路）
〃　林　ツタエ（中尾）
〃　隈江　稲（黒谷）
〃　水口トシ子（蚊口西の二）
〃　柿原繁樹（蓑江）
〃　黒木畩松（正祐寺）
〃　原　重隆（竹鳩）
〃　中村　博（川田）
〃　富岡勘輔（道具小路南）

※ 挿絵・表紙

中嶋正夫（下屋敷）

※ 資料収集・調査・編集者

江川雅章（社会教育課長）
岩切昭一（社会教育課長補佐）
東　啓三（社会教育係長）
矢野千秋（社会教育指導員）
小澤　浩（社会教育指導員）

※収集協力者氏名

○高齢者ボランティア「ふるさとを伝える会」会員

森　仲吉（鴫野）　永友　年明（持田）
原　重隆（竹鳩）　三嶋　俊（羽根田）
上野　正英（下屋敷）　西村　満（道具小路東）
手塚　貞夫（養江）　押条　磯松（脇）
福永ミサオ（東平原）　故河野　花江（宮越）
岩切　久江（中尾）　故財津モトエ（川田）
黒木　文子（小丸下）　林　ツタエ（中尾）
奥村ヤエ子（大工小路）　松岡　美也（道具小路東）
故西方　文子（蚊口下）　黒木　畩松（正祐寺）
中村　博（川田）　富岡　勘助（道具小路南）
隈江　稲（黒谷）　水口トシ子（蚊口西の二）

※資料収集・調査・編集者

高鍋町教育委員会
教育長　岩永　高徳
社会教育課
・井上　文秀　・古江　悦郎
・松井　克興　・岩切　哲雄
・故加藤　秀雄　・小澤　浩
・江川　雅章　・矢野　千秋
・高嶋　博
・竹内　昭博
・岩切　昭一
・東　啓三

社会教育指導員

編集後記

高鍋町の高齢者ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」のみなさんのご熱意によって、たかなべの民話・伝説・物語・由来・思い出・わらべ歌・戦中戦後の体験談・風俗・風習・追憶など多岐にわたった貴重な資料を第一集から第六集まで発刊しました。

ところが、第一集、第三集、第四集はすでに在庫もなく、各地より講読したいという要望がありましたので、本年度は「ふるさとを伝える会」の会員の方々のご賛同を得て増刊し、第一集から第六集まで六冊を合本して発刊し、後世に残すことになりました。

昭和六十一年度から収集活動にご尽力いただいた方々、挿し絵と表紙を描いていただいた中嶋正夫さん、収集に当たっては、長老小椋美義先生ご夫妻をはじめ、大先輩の永友千秋先生、平田和彦先生方には特別な御指導、御支援を戴き、さらに、高鍋史友会の方々、町内在住のお年寄りの方々からも暖かいご援助をいただいています。ここに皆様のご支援に対し、心から感謝申し上げます。

会員の中には、すでに故人になられた方々も居られます。衷心から哀悼の意を表します。

ここに刊行しました「たかなべ伝・伝」を今後、各家庭で、あるいは幼稚園、保育園、小・中学校、子ども会等で活用され、高鍋のふるさとを思う心に、ふれながら、新しい高鍋のまちづくりに生かして欲しいと願っています。

編集者　小　澤　浩